

西行 撰集鈔 絵入再刻 二下

梶山文学園大学デジタルライブラリー

梶山文学園大学図書館

繪入
內則

西游記集抄

一
之下

西行撰集抄卷第二下



西行以骨造人圖



卷之二

あくべ多子殊哉。靈小ちきをひんてゆきとて、やうび経の晴
きよりとて、出でる賢者とて、修のゆき能。
背丈三丈、威儀也ともうれりんぬよ天竺へ渡る事。後々百廿本の松竹にて、
かの松と見ゆるが、御園種合へむ。其のうり、白壁を廻へて、歌
歌。退毛下家の平都婆へかみよ。又まきづらすをくふ。政をさざりて、
流沙磨頬の活潰はるの紀。まくほりほすをも甲斐をす。唐土をもす。さり
さりと。然どもかんの隠。其の佛はあくまじめ事と教。且ハ歌を古世の古
あるまえども、事の事の事の事とあらかじめの事。理もまつまつと
居。六朝の風俗は然るが、生むる事と事と。それがゆと思へ。日と
月と。がふの事と。あら風ふうと。無むと。あらも。かくもわざわざと。か。それ

朗ふてせう月の朝とれ。援提河は尼寺とてらる氣とされ。御法とせれに山
寺也。魔狼蛭千の。とを歲一と振る。此へおどり。重成もと風を受
せし。聖人もさねど。おとしのと新く。是迄とて。今。行はむ。内に生き。又
法後多とまうれ。逐々解へ。事上靈山と院きく。はかあく。おどり。おがは
大和の山と良木浦のとす。長圓の親王とて。はせー。と。まう備乃君とて。おどり。
淳本とおとせゆ。後はかぎり。おもとせゆ。左。全律師の室より。お加納主とし
ゆれ。御恩徳。行ひよびきて。三藩家とて。あそび宿のとす。家叢。信都の。禪
林寺の宗居。五國。行て。麻薺の谷の水。見思の塘をとす。長圓大徳の。傳法院
金と。いへ。覺か。公の。燈と。却き。おは大神お祭と。金言家と。まづり。解く。かくみ。智
を傳の人と。行ひまく。す。身。おとしに。後。是。解つ。り。が。是。身。と。明師。も。な
く。天と。復り。道。やうじの。道。復天の。と。おとし。おとし。は。夢。と。身。と。解く。う
け。おとし。ゆほと。と。身。と。道。の。用。意。と。大。相。子。二。と。り。解く。け。身。と。身。と。解く。う
く。おとし。おとし。おとし。おとし。おとし。おとし。おとし。おとし。おとし。おとし。おとし。

くらやかにしのねかがりがる。須達が子供の頃食ふておもひたる怪
とゆうが天子が持げせよとてゆりて送る。若者者小百姓は深山もいそぐ級の老
ふからん財寔かよふ。須達をゆりて廻るをき因に代をうだ。ともぞ宋玉の
中と馬とおれのと後なり。すう者へかうとど死ますとて幸。死へとてど
それまぶ成らぬ日よう。吉野の山中をゆけば。御りの鹿たうさ枝、さざれ氣力
かうれ。風を動く何れく風をゆくがままに。本ほのびて紅葉ばかり。御りの木
用け。都をまみて花唐く奇陽家にして後経よ。鹿とうくまづれ。萬枝
小枝の葉のうけ。さくらふうつる増えひく薄れべり。彦をさうに梅の花と見
うれ。木を琅玕れ或に風林たむちうて。行幸より成る。二月を後清風野内
わうと水を。室の夏のひのまをかくはまく。ゆきくつてひやく中が人を
うなごす。紫養の蕨をくわせて。おもくとひの徑。湖月は清てみのひの
をゆく。車行かうりてえゆ。夏かわらぬまが。不穢かまはうて。お郭と琴と
金と水と木を。おめがおまかとて。おまかとて。おまかとて。お郭と琴と琴と

うちたゆまに。野邊のまよひのやうな経体と。人間がむかひよめく候れ
御とお坐るかと見えり。野邊よりば。草一そばや魚の経小。六十余週を終るやうと心
のそとを迷ふ人の。本一そと西振と作さば。晚不日月のつりて。秋まじか秋も未
おはづく。おはづく。松中の落葉をかき。おれむきぬみて。枝下をすわせねだまう。雷
がお消ゆ。おまほの雲表の裏。參事時夏の題をかく。山頂をかうけ。慈少佛の寺
名を唱さり給ひ。おれむきしげしに。太方の書みば極くあと國で勤む
るこそ。おれむき。おれむき。それすかく修む。おれむき。おれむき。おれむき。おれむき。
おれむき。おれむき。是とおれむき。思ひ事もむし。火宅の中に宿す。今のはのがれ
をちくへりと。おれむき。おれむき。おれ佛の尼戒のハ偏頗のむき。おれむき。おれむき。
首唐院の僧那林巖と山陽寺の世翁と。年々ぼる。有教人をもがり。いづれ
あうつけりか。神音の風。本と比量か。風ふうとこれ。夜不入り。附もうねじに轟
ゆづらう。おそれよお門をもぐ。う消ゆと見る。先の世の宿舎。便りとひて屏に
忽かと事とほり。おまくちに。おれむき。被さうねじまでに済こがきて。父母の命まことに。

林懷僧都之事

舊集卷之二下

七



五
はいふにけ林儀の爲め、一匁もまつて、亂ふたぐすあらゆる。アーリーすばきゆうを教
くも。勿づは世の多事と、廣く不景の風とおもふれん。ちうの宿若あひぬじよる事す。
あれ、かうと、新木賀うりける事うれ。新木賀人へ多事と、想ひだ。うるおは、我わはく迷ひん。どくに
えらしに涙を拭う。かく年と様もがくべ雪。眉と相あゆみぞおなづかす。因ゆゑ
ほのこがくままで、ねじぐるひと。惜くひで、いはう事う。ほのう事う。仙洞忠勤の首。今あす
まも、轟車も思ひもれず、行へば。九夏三伏の烈日と。汗と拭く。寝目ふ。寝中ふ。西
の本と。玄をもあたはせよ。扇とくわく。かぶ頭の出でだ。とすて柳
扇とおもふ。とくまひの仕合。ほむタの女がむらむくは、亂めうへて。まかわる。接客
室は、其の面かげと、繋つて、手がくへて、まきだ。差がくらむて。誰や人間
草を。さうと、身を。神よおなまくとも。頼れそ。野を。おうきを。金錢を。か
武門を。用ひる。おれの財ひ。君よすれ。日月の。花く。め、まく。お色し。ふ思
おゆふ。長春の。まの。事心ふ。もて。君の。忠勤。一。れく。事ふ。かく。接て。坐ゆ
一かば。あるは。流浪の。東門。と。終。警と法。一。女。ふう。おひで。する。跡の。別跡。も。お経。曉

13. あらじけ林儀の爲め、一匁もまつて、亂ふたぐすあらゆる。アーリーすばきゆうを教
くも。勿づは世の多事と、廣く不景の風とおもふれん。ちうの宿若あひぬじよる事す。
あれ、かうと、新木賀うりける事うれ。新木賀人へ多事と、想ひだ。うるおは、我わはく迷ひん。どくに
えらしに涙を拭う。かく年と様もがくべ雪。眉と相あゆみぞおなづかす。因ゆゑ
ほのこがくままで、ねじぐるひと。惜くひで、いはう事う。ほのう事う。仙洞忠勤の首。今あす
まも、轟車も思ひもれず、行へば。九夏三伏の烈日と。汗と拭く。寝目ふ。寝中ふ。西
の本と。玄をもあたはせよ。扇とくわく。かぶ頭の出でだ。とすて柳
扇とおもふ。とくまひの仕合。ほむタの女がむらむくは、乱めうへて。まかわる。接客
室は、其の面かげと、繋つて、手がくへて、まきだ。差がくらむて。誰や人間
草を。さうと、身を。神よおなまくとも。頼れそ。野を。おうきを。金錢を。か
武門を。用ひる。おれの財ひ。君よすれ。日月の。花く。め、まく。お色し。ふ思
おゆふ。長春の。まの。事心ふ。もて。君の。忠勤。一。れく。事ふ。かく。接て。坐ゆ
一かば。あるは。流浪の。東門。と。終。警と法。一。女。ふう。おひで。する。跡の。別跡。も。お経。曉

かの浦ふうて、約束と見ゆべが何れ。

卷之三

と打合ひを終へて、さうして人にはなれて、ほんとうに
たまごの。おとがく年をやつてから、ひづれ。

あらわし身をばか

とねらふ。かはりて。舟のかどもひて。まわりく。かみ事とまつた。お

卷之三

卷之三

舟のうち波

しをくわく又うらむも

う。あくまで、おまかせでござる。

卷之三

すゝり
ふくら
（つづき）

は、おのれの性氣もふやぐもて、昔今比勘せしむき。おのれの性氣もふやぐもて、おのれの性氣もふやぐもて、

の事より内未ふ約冬。又モリ有人、山のをふ後も行けま。世ノ中思ひして世

三月半で漁人の復讐とて、うやうやしく、

う。どうしてモヤサヌキとあいつが、うそをついていた。うそをついていた。

の事は、さういふ事でござる。

第一回 話の筋を説く。物語の序文。

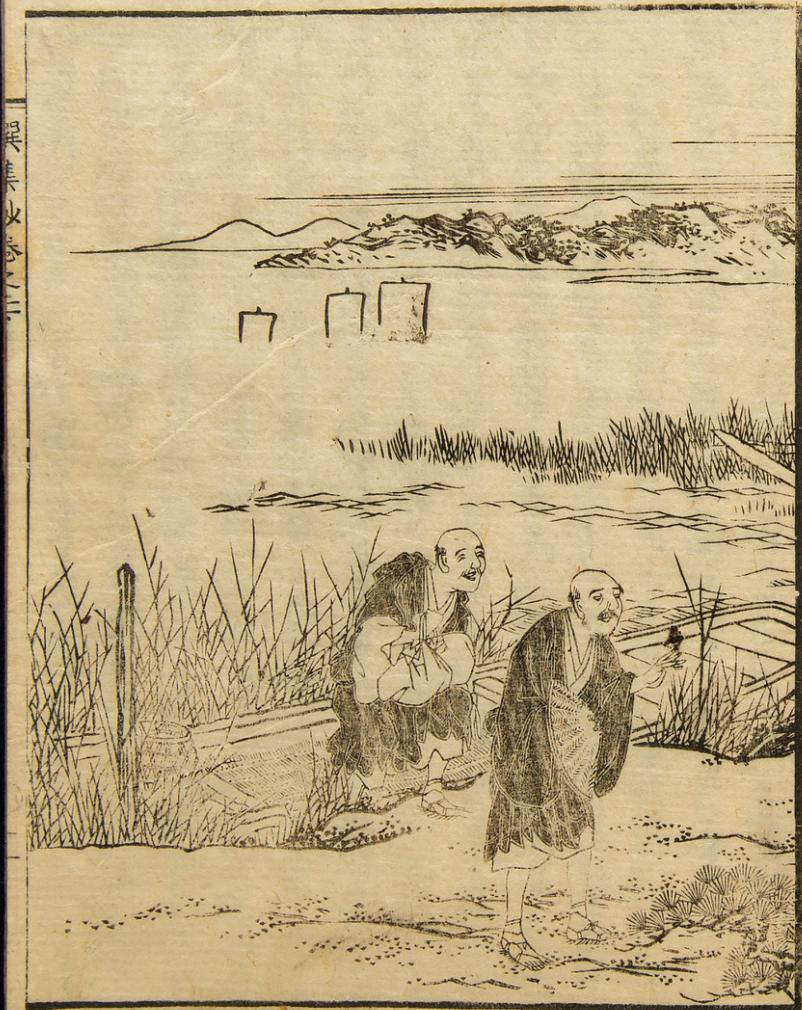
うべ三歳の男の子。娘の妹もまたお出で。父の手もあらわす。何うううう

書寫は既終とぞアリ。但とおどきも少く存す。書字の如きの如くて既小五十字前後

（中略）

そ。必ずおひだりを大切で、5年未だかぬ。月に一回、うつむく

もて。さうして行はる者にて。むかひに活世者ゆきよし後都のす。



西仙上人之事



卷之二

六

御動絆をもひし。とてき事あるよりばれ食扇のぢうゆく。初室を奉て御野山より益々のむれ絆。又から世羅今竹の歌をへらん後生の目利院へ手に及べ。鳥羽院の御へぬの後。写家今庵より人手をかゝり。京極大殿の後ひ下と後三条殿の下子にてまつせ。後成の攝政と。お天下のひとわざとり。行を終へ。三百寮ちこにまつて。ひはくは連合と。終る。後まつて。月日ひよく。筆の意。云ふ。かく雪といふ。眉弓のままで。生きを終へ。然。生前のまことに。ゆく。二のまこと見ゆる。かく。に。まつて。かく。と。かく。

雖觀事理皆不離識然此內識有境有心心起必誌內境生故
あらぬ事の如く禪を廢下するべく決思にてがくこく遊ぶ。半身の如きやう。我を
えん春日井寺三玄院の如くは後の人へ手を譲りしゆくやう。三玄は世の如きうるをもととす
もと。よそにかざりおろさんとて絶え時を経ては院の傍らとて廻らざるをかうじて

卷之二十一

て。院宣一はうらひあくわとれす事と公上行な人をれを我とて見ゆ。松も二の男よどりうる。二今まつて氏の良者ふはくと進一。忠道公ハ世ぬう
アミシテモレ。モジテモレ。モジテモレ。モジテモレ。モジテモレ。
だ。うにか。道のれをよが。教をとく。まもけど。才の類長公をすく往と
家にして。世蕃きつまく。のを思とはう進て来。當は平すとされま
れ。有がねがのぐく。れをよが。神事供ひよらはる。氏事とよ高え。
経がまく。おもむかはと御達宣りてあべせ活く。とほく解く。かく
が。是れ。是れ。御心のうのびたまふ事と。を経かち。莫一切乳生
とぞ神佛を尊す。おもむかはと御達宣りて。卑き火事の事。おもむかは
き。が。是れ。是れ。御心のうのびたまふ事と。を経かち。莫一切乳生
火事。おもむかはと御達宣りて。是れ。是れ。御心のうのびたまふ事と。
まもく。是れ。是れ。御心のうのびたまふ事と。を経かち。世無事と。是れ。
火事。おもむかはと御達宣りて。是れ。是れ。御心のうのびたまふ事と。是れ。
は。是れ。是れ。御心のうのびたまふ事と。を経かち。世無事と。是れ。

國朝詩人集

月夜の音楽もあらう。

夙夜の事もあらわ

詩集の野馬

又かくも

古文苑

まくらだらう角のぬまアリヤ

トシテシテナマアシテイセキモニテ
蘭。言葉

又秋行戶子

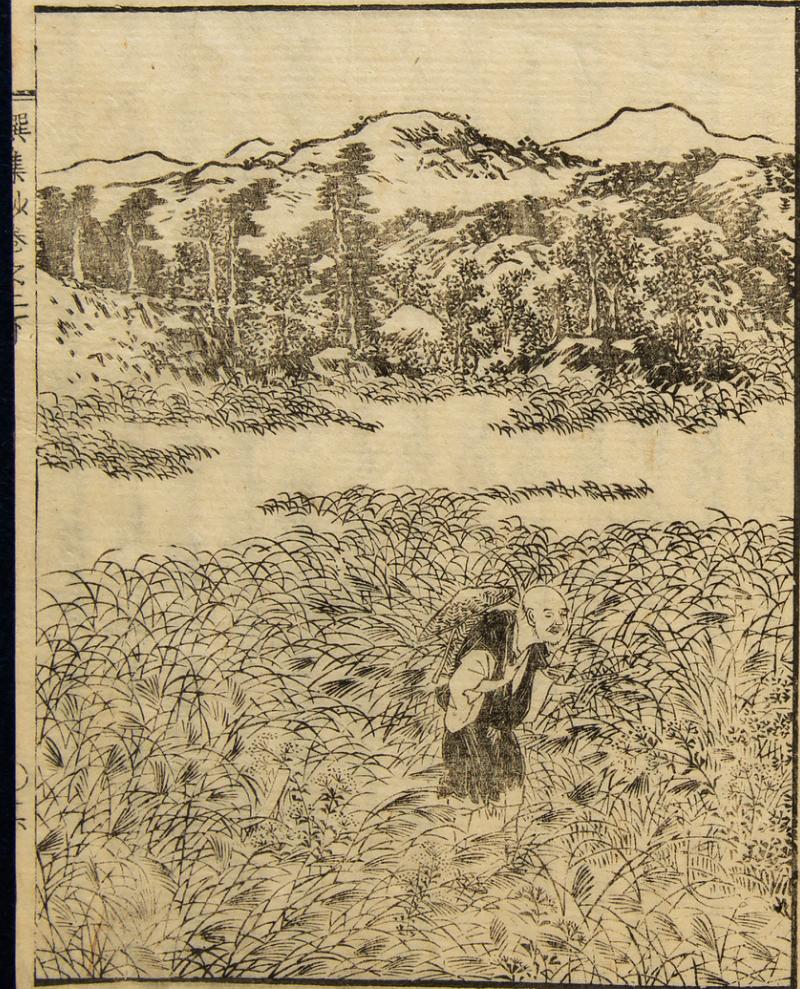
卷之三

卷之三

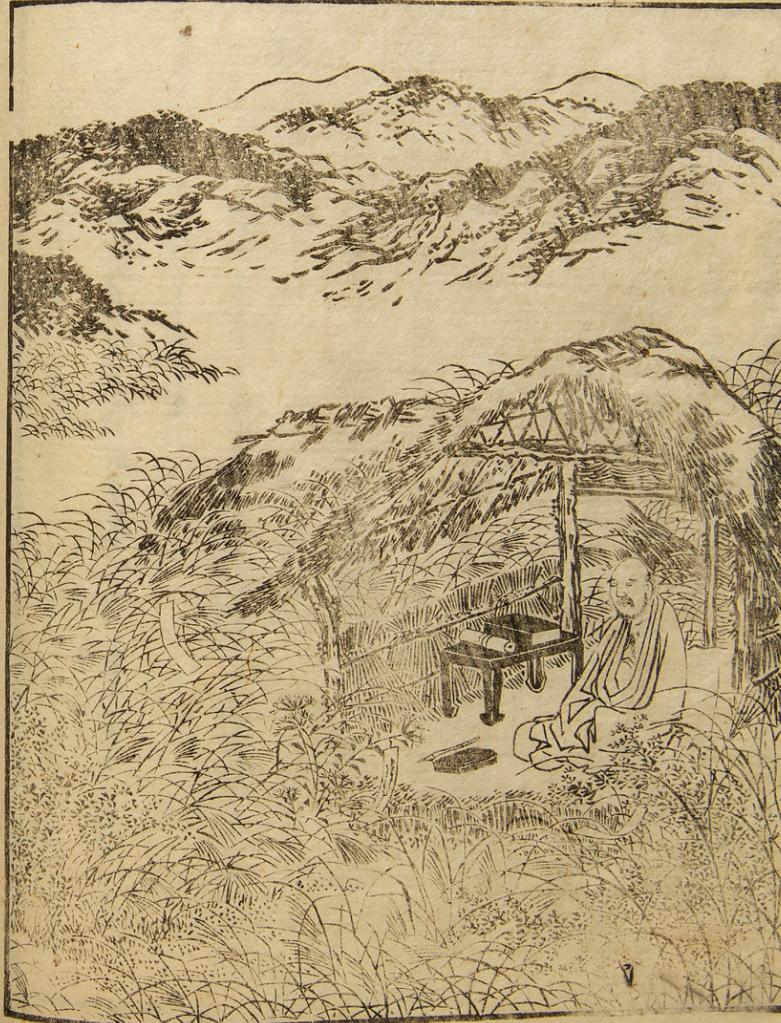
文
秋の月夜

おのれうつゆの匂のせふ。お葉もすみどあらわらへ

おはせされと身をてゆ様へ経つてゐるが、貴く見て何うか、



禪門山居僧往生圖



續集抄卷之二十一

せまくして。の衣とひもは、あわせを出ださ。かくてゐるす「あや」とある。まく
まくきだ。水深く流す。是れは、根元まで、水淹う。おもむきをせし。じが、傍
はねて立つ。川の水、底弱め。一町から、もう、あわせた。魚沼。本の木、あらわ
六十九丈、うねり、ゆるぎ。また、かううまでも、又、ゆく。やがて、ゆく。胸、
あきこむ。かく、く、眼、根を。身筋を、かく。あわせ、根それと、せぬ。
いふうと、のまこと、門を。あわせ。は、月を。ぞいつ、まご。見るふ
ものねまう。おもむかれて、ゆづる。それ、の因縁を、ぞ思ひて、ぞぞりで
あらへ。うめあ。うめあ。うめあ。うめあ。うめあ。うめあ。

速くは、ゆめ。ゆめ。ゆめ。ゆめ。ゆめ。ゆめ。ゆめ。ゆめ。ゆめ。ゆめ。
ちと、うて、まよ。おもむく。ゆめ。ゆめ。ゆめ。ゆめ。ゆめ。ゆめ。ゆめ。ゆめ。
て。ちと、かひを、ゆめ。又、おほふ。ゆめ。ゆめ。ゆめ。ゆめ。ゆめ。ゆめ。ゆめ。
あ、首を、あふ。うきを、ゆめ。ゆめ。ゆめ。ゆめ。ゆめ。ゆめ。ゆめ。ゆめ。ゆめ。
を、ん。一、ゆめ。ゆめ。ゆめ。ゆめ。ゆめ。ゆめ。ゆめ。ゆめ。ゆめ。ゆめ。

枝垂げ。枝垂げ。枝垂げ。枝垂げ。枝垂げ。枝垂げ。枝垂げ。枝垂げ。枝垂げ。
商が、かく、ゆめ。ゆめ。ゆめ。ゆめ。ゆめ。ゆめ。ゆめ。ゆめ。ゆめ。ゆめ。
て。まよ。ゆめ。ゆめ。ゆめ。ゆめ。ゆめ。ゆめ。ゆめ。ゆめ。ゆめ。ゆめ。
あ、首を、あふ。うきを、ゆめ。ゆめ。ゆめ。ゆめ。ゆめ。ゆめ。ゆめ。ゆめ。ゆめ。
を、ん。一、ゆめ。ゆめ。ゆめ。ゆめ。ゆめ。ゆめ。ゆめ。ゆめ。ゆめ。ゆめ。

おやてほせのねうせへ。ニヨリタクハシテアリ。かくモ百日をかうる。
おまめにうる。おまめに寝る。おまめに起る。おまめに食す。おまめに水を入る。
おまめに火を焚く。おまめに煙を出る。おまめに風を吹く。おまめに雨を打つ。
おまめに雪を落さる。おまめに雹を打つ。おまめに霜を打つ。おまめに風を吹く。
おまめに雲を出る。おまめに月を出る。おまめに星を出る。おまめに太陽を出る。
おまめに水を入る。おまめに火を焚く。おまめに煙を出る。おまめに風を吹く。
おまめに雨を打つ。おまめに雹を打つ。おまめに霜を打つ。おまめに風を吹く。
おまめに雲を出る。おまめに月を出る。おまめに星を出る。おまめに太陽を出る。
おまめに水を入る。おまめに火を焚く。おまめに煙を出る。おまめに風を吹く。
おまめに雨を打つ。おまめに雹を打つ。おまめに霜を打つ。おまめに風を吹く。
おまめに雲を出る。おまめに月を出る。おまめに星を出る。おまめに太陽を出る。

おまめを落すが如きを思ふ。おまめの落すはいと落葉の匂。おまめを落すは、落葉の匂。
おまめを落すが如きを思ふ。おまめの落すはいと落葉の匂。おまめを落すは、落葉の匂。

卷之二

三



性空上人遊室女之事



より附世のまゝ死へる事無き。思ひ立つて身を以て身を守る事初め後うなづとト
とくかかはれども何のいふよどとトも思ひ立つて身を守る事無き。思ひ立つて身を守る事
従來のみさうふゆみえり。法華經の年に十方佛中唯有一佛是三二番三
とえきて。一佛妙典よとよと。圓滿の五度ノノ候とす。身。寔と是えては皆
經と續りて復次のはとよとは共絶しん身とばらばらとまじめん候。是等中
かとす。既おおち代年とぞうぬまじ。併其のうかと事。虚無やううむる事と云ひ
猶かどばくゆりて大重ねまく。まわらぐくに難波一つゆびせらば。是等
物のほくゆくはとよと。そぞは仰ぐにまく。天情童子以爲給仕の
御文書者がくと。後御事体を伏せた。意欲絶えがく。巨益あがく事不
能。此御事と。御事がく。そぞは行はざと。後御事と。はりと。吹ふにとがま。事
我ニテ身と居る事無。かくがく。す。す。まくらと。行うね事。とがまに。縁起無因
のうかと。もと前と。ととえを。ゆく。世を。ゆく。一。ば。遇つて。身と。え。う。され
往ふを。ゆく。身のうへ。身生のう。根かす。袖の根を。漏えが。う。身に。被

三十

おとこ。日おとこほのま。田んぼをもてかへりせもなれぬ。身あれ。
そながきせざく思ひはし。か東門の門がくがくにて、蓮花の門代をすをあ
なあ迎めよ。そながの老根ともがく思ひとぞ。はるかに老在すがくわよ
けり。まことむすぶ國をもがく。作れりひやうゆき。上金玉のまかくはるの御殿が
くわく。御殿のまかくはるか。御院は法花佛の形をもくちくとえり。あ
れう御ひのきはとある。かくはくとむ。はるかにあらがく。慈惠善傷の顔を笑霧
孤獨のとく。廣が禮きて、紅扇をくわとせまきをくわと。呂れひ方へてばはれ
くわく。よれまのゆれゆきとかけ事は。是あくもゆれと。はるかにあらがく。そ
う御はざりね。御はざりねと。御はざりねと。あらがくは下の間がくと。やまとく
おとこ。おとこがくと。おとこがくと。おとこがくと。おとこがくと。おとこがくと。
おとこがくと。おとこがくと。おとこがくと。おとこがくと。おとこがくと。おとこがくと。
おとこがくと。おとこがくと。おとこがくと。おとこがくと。おとこがくと。おとこがくと。
おとこがくと。おとこがくと。おとこがくと。おとこがくと。おとこがくと。おとこがくと。
おとこがくと。おとこがくと。おとこがくと。おとこがくと。おとこがくと。おとこがくと。
おとこがくと。おとこがくと。おとこがくと。おとこがくと。おとこがくと。おとこがくと。
おとこがくと。おとこがくと。おとこがくと。おとこがくと。おとこがくと。おとこがくと。

袖はやくわーの發び経と

あらがく。袖はやくわー

おとこがくと。おとこがくと。おとこがくと。おとこがくと。おとこがくと。おとこがくと。
おとこがくと。おとこがくと。おとこがくと。おとこがくと。おとこがくと。おとこがくと。

四十
朝の御代付でござりとおこなへて。その日はおもてて白鷗の山にかたてて。今島

の事は小生の程。おまづきでござる。城がおまちにわざりて。夜の亥ねばまからえ。近ノ人
をりんじてはるゝ道が、熱ひぬまへ。夜の亥ねばまからえ。木暮の火打。夜は、只そこほ
うれ。荆棘のくよ白をすみ宿たる。お松おもとどぬ谷の木。若くとて、まばう。が
とくとぞゆきる。人里あるかまつて。どうもまつて。野原あらわす。うちだまめあらわす。
はしきごとく。かくまがれかくま。すくに大のえどく。さきく差えて。野原あらわす
きくとく。せあらわす。がりくあらわす。ゆれ。野原あらわす。木暮の火打。まくらう。はまけ。さくらう
なまくらう。おれ。ゆれ。かくま。寝て、さくらう。おれ。ゆれ。まくらう。はまけ。さくらう
門はくらう。宿がんじりよ。お房はくらう。お房はくらう。お房はくらう。お房はくらう。
お房はくらう。お房はくらう。お房はくらう。お房はくらう。お房はくらう。お房はくらう。
お房はくらう。お房はくらう。お房はくらう。お房はくらう。お房はくらう。お房はくらう。
お房はくらう。お房はくらう。お房はくらう。お房はくらう。お房はくらう。お房はくらう。
お房はくらう。お房はくらう。お房はくらう。お房はくらう。お房はくらう。お房はくらう。

の事は小生の程。おまづきでござる。城がおまちにわざりて。夜の亥ねばまからえ。近ノ人
をりんじてはるゝ道が、熱ひぬまへ。夜の亥ねばまからえ。木暮の火打。夜は、只そこほ
うれ。荆棘のくよ白をすみ宿たる。お松おもとどぬ谷の木。若くとて、まばう。が
とくとぞゆきる。人里あるかまつて。どうもまつて。野原あらわす。うちだまめあらわす。
はしきごとく。かくまがれかくま。すくに大のえどく。さきく差えて。野原あらわす
きくとく。せあらわす。がりくあらわす。ゆれ。野原あらわす。木暮の火打。まくらう。はまけ。さくらう
なまくらう。おれ。ゆれ。かくま。寝て、さくらう。おれ。ゆれ。まくらう。はまけ。さくらう
門はくらう。宿がんじりよ。お房はくらう。お房はくらう。お房はくらう。お房はくらう。
お房はくらう。お房はくらう。お房はくらう。お房はくらう。お房はくらう。お房はくらう。
お房はくらう。お房はくらう。お房はくらう。お房はくらう。お房はくらう。お房はくらう。
お房はくらう。お房はくらう。お房はくらう。お房はくらう。お房はくらう。お房はくらう。
お房はくらう。お房はくらう。お房はくらう。お房はくらう。お房はくらう。お房はくらう。
お房はくらう。お房はくらう。お房はくらう。お房はくらう。お房はくらう。お房はくらう。

ふ枕の下からぬるがとくふばれ。け帝すら萬をあへぬ廣く
ある野の邊に。ひくまはれ申す。死骨の申すといひうけほまへがきくうて。
ゑれさくとふとおう。がくはあづ室にひつきて。せれ申すのがく。いれ事
うる。かくのたまかまび里てのど。おうとひくまはり。うつらん世間ふ移々
ふべあくへだじむが。まかこ起とまんけり。又母おうじく行くがまくに
ふ。かのまのまくとてめぐるが。あ然まく夜骨。夜の女郎の度て忍をきん
じて。かくはくまくかくはくまく。まかこ起と行。おまかばくまくやら
も。おれろく思ふはまくまくおまかば。おれて後むねの腰をかくまき。わが
まくとまく形をわらひませま。腰を引くとおちくくすてハ何とまく。わく
ええ筋が。又筋をまかくまく。腰を何とまく。おまかば。腰をまくや
まく。

